

学ぶことへの意欲を高める生活科教育の在り方

指導主事 植松 利晴

Uematsu Toshiharu

要 旨

生活科は、平成元年の学習指導要領の改訂に伴い、低学年児童の発達上の特徴に即して新設された。以来十数年を経て、幼児教育との連携や気づきの質を高める指導など、生活科教育の一層の充実が求められている。本研究では、生活科教育の特質や現状を踏まえながら、学ぶことへの意欲を高める生活科教育の在り方について研究を行った。

キーワード： 知的な気づき、言葉と体験、思考と表現の一体化

1 はじめに

平成20年1月の中央教育審議会答申（以下「中央教育審議会答申」という）において、学習意欲の向上や学習習慣の確立の重要性が示され、その中で、①体験的な学習や知識・技能を活用する学習などを通じ、学ぶ意義を認識させることが必要、②学習習慣の確立には小学校低学年・中学年の時期が重要であると述べられている。

生活科は、具体的な活動や体験を通して、自分自身や自分の生活について考えさせるとともに、その過程において生活上必要な習慣や技能を身に付けさせ、自立への基礎を養うことを目標としており、今後、生活科が低学年教育の中心的な役割を担うことが一層求められている。そこで、学ぶことへの意欲を高める生活科教育の在り方という視点から研究を行うことにより、新学習指導要領の実施に向けた生活科教育の改善の方向性について明らかにしたいと考える。

2 研究目的

中央教育審議会答申において生活科の改善のポイントが次のように示された。

- ①気づきの質を高め、活動や体験を一層充実するための学習活動の重視
- ②教科学習への円滑な移行や幼児教育との連携
- ③安全教育に関する指導や自然のすばらしさ、生命の尊さを実感する指導の充実

そこで、生活科教育の特質及び現状や課題を踏まえながら、生活科教育の一層の充実を図るための改善の在り方について探る。

3 研究方法

- (1) 生活科教育の現状と課題の把握
- (2) 学ぶことへの意欲を高める指導の在り方
- (3) 学ぶことへの意欲を高める評価の在り方
- (4) 生活科教育の改善を図るために高めたい3つの力

4 研究内容

- (1) 生活科教育の現状と課題
ア 生活科教育の現状と課題

中央教育審議会答申において、生活科の現状が次のように示されている。

- ・ 学習活動が体験だけで終わっていることや、活動や体験を通して得られた気づきを質的に高める指導が十分に行われていないこと
- ・ 表現の出来映えのみを目指す学習活動が行われる傾向があり、表現によって活動や体験を振り返り考えるといった指導が十分に行われていないこと
- ・ 児童の知的好奇心を高め、科学的な見方・考え方の基礎を養うための指導の充実を図る必要があること

このような現状については、次のような要因が考えられる。

(ア) 思考と表現の一体化という低学年の特質を生かした指導が十分ではない。

(イ) 地域の人や社会、自然など身近な環境が十分生かされていない。

(ウ) 直接かかわる活動や体験の中で生まれる知的な気づきを大切にされた指導が十分ではない。

子どもが生き生きと主体的に活動している時、そこには、様々な気づきがある。人や社会、自然について驚いたり、感動したり、不思議に思ったり、考えたりしている姿である。こうした気づきは、その後の活動を更に広げたり、深めたりしていくきっかけや動機となる。また、発見の喜びを実感したり、対象への認識を明確にするなど、子どもが生活や学習に対してより意欲的に、自信をもって取り組むために重要である。

また、活動や体験の中で生まれる気づきが知的であることを見取り、そのことを子どもに自覚化を図るとともに、更に高めたり広げたりする教員の働きかけが大切である。

イ 生活科における関心・意欲・態度の特質

生活科の学習は、子どもが身近な人、社会、自然と直接かかわる活動や体験を通して行われる。また、生活科の学習は、自分と身近な人、社会、自然とのかかわりに関心をもつようになることを目指して行われる。子どもは、身近な人、社会、自然とのかかわる中で、様々な刺激を受け、「どうして〇〇なのだろう」「すごいね」「もっと〇〇してみたい」など、不思議に思ったり、驚いたり感動したりするなど、その刺激に対して、様々な反応する。この場合に感じる感情が「興味」と言われるものであり、その方向に向かって対象に自ら積極的に働きかけようとする力が「関心」と言われるものである。さらに、その方向に向かって、活動に没頭したり、熱中したり、努力したりしてやり遂げようとする力が「意欲」と言われるものである。

子どもが人、社会、自然と直接かかわり合う中で、それらへの興味・関心・意欲を積み重ねながら、次第にそれらに対する「態度」が形成されていくのである。つまり、「態度」は、その場限りのものではなく、かなり持続的なものであり、いったん形成されると長期にわたって持続される「対象や自分へのかかわり方」であると言える。

「生活への関心・意欲・態度」にはこのような特質があり、具体的な活動や体験を通すことや自分とのかかわりを重視する生活科では、こうした情意的な働きを大切にする必要がある。

ウ 生活科における学ぶ意欲の現状と課題

生活科における学ぶ意欲の現状と課題について、国立教育政策研究所における「全国的かつ総合的な学力調査の実施に係る研究指定校事業（平成15・16年度）」の分析結果には、次のように示されている。

各学年とも、身近な人、社会、自然及び自分自身に関心を持ち、進んでそれらとのかかわり、楽しく学習や生活をしていると報告されている。「友だちを誘って意欲的に学校探検をする」

「家族のために自分でできることを積極的にしようとしている」「地域の人に進んでインタビューしたり、メモをとったりしている」「継続して植物の世話をしたり、家の人に聞いてきたことを世話に生かしている」などの報告がある。「進んで～しようとしている」「意欲的に～している」「繰り返し～している」「夢中になって～している」など、活動に対する関心・意欲に関する報告は多い。

生活科の学習においては、各学年ともに高い実現状況にあり、子どもが自ら対象とかかわり進んで学習しようとしているなど、意欲は高まってきているものと考えられる。しかし、一部には、「他のことに気持ちが向いて、意欲的に活動に取り組めない。」「長期にわたる活動に意欲が持続しなかった。」「活動を自分で決められない。」などの報告もあり、指導の工夫・改善が求められている。

(2) 学ぶことへの意欲を育てる指導の在り方

ア 具体的な活動や体験活動の充実

生活科では具体的な体験や活動を通すことが重要である。それは、子どもの学習意欲を高める観点からも重要である。

具体的な活動や体験を通すということは、子どもが体全体で身近な環境に直接働きかけることであり、また、そうした活動の楽しさやそこで気付いたことなどを表現することである。例えば、身近な自然を対象にした具体的な活動や体験を通した学習では、自然についての直感的な特徴付け、比較、観察、関係付け等、また、そうして得られた考えを表現するなどの知的な活動が活発に行われる。さらに、自然物の不思議さやおもしろさ、それを活用して遊ぶ楽しさなどに気付いた子どもは、身の回りの自然や自然物を活用した遊びに一層、興味・関心をもち、それらについて調べたり、遊びを工夫して楽しんだり、それらを表現したりする。

このように学んだことは、子どもの印象に強く残るとともに、学ぶ意欲を高め、その後の学習や生活に生きて働く力を培うことにつながっていく。それゆえ、具体的な活動や体験を通した学習を一層充実させていく必要がある。

イ 学校や地域の特色やよさを生かした授業づくり

生活科は、子どもの生活圏である身近な人、社会、自然を学習の場や対象とする。生活科の教材は、そうした地域にあることや、そこでの子どもの生活の中にあることを取り上げることから、学校の教育環境や地域の特色やよさを生かした授業づくりが大切である。

(ア) 子どもの実態を生かす

子どもの興味・関心の傾向、経験、人間関係、生活習慣や技能などについて、アンケートやウェビング等を活用するなどして、実態を把握する。

(イ) 学校の教育環境を生かす

校内の施設・設備などの教育環境を把握し、有効に活用する。

(ウ) 地域の実態を生かす

地域の自然環境、町や人の様子、公共施設や季節の行事などを、幅広く把握し、地域の特色やよさを生かした生活科学習を展開する。

ウ 年間指導計画の工夫

(ア) 2年間を見通したカリキュラム作り

8つの内容をバランスよく配置し、児童の思いを生かした単元構成となるよう時間的なゆとりをもたせるなど、配慮することが重要である。

(イ) 人、社会、自然と繰り返しかかわること

子どもが直接対象に働きかけたり、対象から働き返されたりしながら活動が連続していくよう、繰り返し体験を位置付けたり、対象との出会いを工夫したりすることが大切である。

(ウ) 他教科等との関連

他教科等との関連を明らかにし、生活科で学んだことを他教科等で生かせるように、また、他教科等で学んだことを生活科の活動の中で生かせるように、単元構成など年間計画を工夫することが大切である。

エ 学習環境の構成の工夫

生活科においては、「子どもは環境によって学ぶ」という考えを重視し、学習環境の構成を大切にしてきた。多様な素材や道具を準備したり、夢中になって思う存分活動できる空間を確保したり、十分活動にひたることができる時間を設定したりすることが重要である。また、子どもの学びの場は、学校から地域等へと広がっていく。学習環境の構成の工夫が子どもの学ぶ意欲を高めていくことにつながるのである。

オ 教員の働きかけ

子どもが生き生きと主体的に活動しているとき、そこには、様々な気付きがある。人や社会、自然について驚いたり、感動したり、不思議に思ったり、考えたりしている姿である。こうした気付きは、その後の活動を更に広げたり、深めたりしていくきっかけや動機となる。しかし、こうした気付きは直感的に、あるいは、無意識のうちに生まれていることが多い。

生活科における学習活動は、子どもの自主性・能動性を大切にするが、同時に子どもの気付きを「意味付ける」「価値付ける」「方向付ける」など、教員の働きかけが不可欠である。教員の意図的、計画的な働きかけやしかけによって、子どもの学ぶことへの興味・関心・意欲を高めていくことにつながるのである。

(ア) 意味付け・価値付け・方向付け

具体的な活動や体験を通して、子どもは様々な知的な活動や気付きをしている。しかし、子どもはそれを自覚していないことが多い。そこで、子どもの行為や表現に「そうそう」(共感)「なるほど」(納得)「すごい」(感動)など、対象や自分自身の行為や表現に対して意味付け、価値付け、方向付ける働きかけを工夫し、一層明確に自覚させることが重要である。

(イ) 共同的な学びの場の設定

学習過程の中に、対象や環境へのかかわり方の工夫や気付きについて交流し合い、互いによさを認め合う場を設定する。交流を通して、「○○さんのおかげで上手にできたよ。」など、互いに認め合うことで、子どもはこれまで気付かなかった互いのよさや成長に気付くことができる。自分自身のよさや成長の実感、新たな活動へのやる気と自信につながるのである。

また、友達によさや成長への気付きは、自分自身の活動をもう一度振り返るための情報として生かすことで、更に活動を広げ深めることにもつながる。

(3) 学ぶことへの関心・意欲を高める評価の在り方

生活科は、その目標から子どもの生活する身近な環境、自分自身や自分の生活に関心をもち、それらに積極的にかかわっていくようにすることが求められる。そこでは、子どもが身近な人、社会、自然、自分自身や自分の生活にどれほどの関心を示し、どれほど意欲的に取り組んでいたか、また、そうした取組を通して、どのような態度を身に付けたかを見取っていくことが大切である。

この観点の評価は、一人一人の子どもに意欲と自信をもたせるようにするとともに、継続的に長期にわたって見取るようにすることが重要である。

ア 生活科の評価の観点及びその趣旨

生活科における関心・意欲・態度については、『小学校学習指導要領生活科解説編』の学年別評価の観点の趣旨において次のように示されている。

身近な人、社会、自然及び自分自身に関心をもち、進んでそれらとかがわり、楽しく学習したり、意欲的に遊びや手伝いなどをしたりしようとする。

これは、生活の知恵を身に付け、自立への基礎を養う生活科にあっては、重要な観点である。生活科では、身近な環境への働きかけとともに、学習したことをその後の学習や自分の生活に生かす実践的な態度を培うことが大切である。そこで、生活科においても、関心・意欲・態度は学習の始めはもとより、学習によってはぐくんでいくものととらえることが重要であり、学習の前提としてあるだけでなく、むしろ、学習の成果としてもとらえるようにすることが必要である。

イ 評価規準及び評価の視点の設定

子どもの姿を的確に見取るためには、評価規準を設定しなければならない。その際、内容のまとまりごとの評価規準、単元の評価規準、小単元の評価規準の視点のそれぞれについて実際の学習活動とのズレが生じていないかといった整合性を確認し、一貫性が保たれているか見直すことが大切である。具体的には、次のとおりである。

- ①具体的な子どもの姿をイメージできる評価の視点を設定する。
- ②互いの視点を出し合い、学習活動を設定し検討する。
- ③質的な広がり、深まりについて検討する。
- ④評価規準と評価の視点の整合性を検討する。

ウ 指導と評価の一体化を図る工夫

子どもの学びの質的な高まりや深まりを評価するには、評価方法を工夫する必要がある。そこで、次の三つの視点を大切にすることが重要である。

(ア) 「広い目」：多様な評価方法で多面的、総合的に見取る工夫

評価方法を多様化して、学習状況を見取り、それぞれの方法で見取ったことを関連付けて判断するようにする。生活科においては、行動観察、子ども同士の会話やつぶやき、発言、作品分析、問いかけ、教員と子どもとの対話の分析など、多様な評価方法を活用する必要がある。

(イ) 「長い目」：長期的な展望に立ち、継続的に子どもの変容を見取る工夫

一単元だけではなく、小単元、単元全体、学期、1・2学年と、長期的な視点に立ち、継続的に子どもの変容を見取り、その評価を次の活動や指導に生かすことが重要である。そのためには、子どもが活動や体験したことについての学習状況を見取るため、自己評価カードなどを工夫し、効果的に活用することが必要である。

(ウ) 「基本の目」：評価規準の具体化・重点化

評価の観点、評価方法を活動の節目に適切に位置付けるなど、指導計画に基づいた評価計画を設定し、生活科の目標、ねらいを具体化した評価規準に照らした、より客観的な評価を行うことが大切である。

5 生活科の改善を図るために高めたい3つの力

(1) 「学習内容を構造的にとらえる力」を高める

生活科の授業を構想するには、単元の基礎・基本とそれを身に付ける上で欠かせない基本的な力（かかわる力、持続的・試行的な態度など）を明らかにし、それらを構造的にとらえる手立て

を工夫して「どのような対象とかかわらせて、あるいは、出会わせて」「何を発見させたり、考えさせたり、表させるのか」などを明確にすることが大切である。

そこで、生活科の特徴の一つでもある単元の構想図を作成する際、次の3つの段階に分けて、構造的にとらえることが大切であると考ええる。

ア 「かかると（出会うと）見えてくるもの」

体験、追体験やたんけん活動など学習内容とのかかわり（出会う段階）

イ 「まとめると、表すと見えてくるもの」

子ども一人一人の気持ちを伝え合い、友達の思いや考えとのかかわり（練り合う、深める段階）

ウ 「振り返ると見えてくるもの」

自分のくらし、実生活や実社会とのかかわり（振り返る段階）

自分が目指す生活科の授業のイメージを明確にし、生活科で育てたい、目指す児童像を明らかにすることである。子どもがどのような学習過程を経て、どのようなストーリーを描きながら学んでいくのか、実生活や実社会とかかわり合っただけで学んでいくのかなど、生活科授業全体像をダイナミックにイメージすることが大切である。単元の構想図をていねいにつくる、あるいは、今一度、じっくり見直すことが学習内容を構造的にとらえる力を高めることにつながると考える。

(2) 「教材を開発する力」を高める

教材には何が必要なのか。その要件を明確にし、それらを踏まえ、様々な工夫・開発する力を高めることが大切である。そこで、次の3つの視点を大事にしながら教材化を図ることが重要である。

ア 子どもにとって感動的、おもしろい、そして、意味ある教材であるか。

イ 生活科の基礎・基本を大切にしたい教材であるか。

（学習指導要領の目標、8つの項目との関連性を吟味する）

ウ 人・社会・自然に対して働きかけ、交流、参加などといった主体的参加が可能な教材であるか。また、先に述べた構想図をつくる、いわゆるカリキュラムデザインと関連付けることが大切であると考える。

(3) 「考える力を育てる授業を構想する力」を高める

考える力を育てる授業を構想することは、生活科で大切にしたい授業の一つである。

そのためには、次の2点を大切にしたい。

ア 課題追究の見通しをもたせる

子どもがはてなを調べよう、気付きや考えを深めよう、広げようとする糸口をつかませる工夫が必要である。「たぶん〇〇だろう」「きっと〇〇じゃないかな」と予想を立てさせることも手立ての一つである。

イ 「思考」と「表現」の一体化を図る

具体的な活動や体験、発表会で終わって、考える力を育てる学習が十分ではない。あるいは、表現力の育成に力点が置かれすぎ、思考力の高まりに向けた指導が弱いとの指摘がなされている。そこで、「考えながら、表現し」「表現しながら、考える」など、思考と表現を一体に捉えた指導・支援の工夫が必要である。

子どもが追究を深めたり、広げたりするためには、気付きを深める材料や手がかりとなる新たな気付き、情報が必要である。それを発見していく活動が例えば「たんけん」である。「自分が考えたとおりの見方」「別の違った見方・考え方ができないか」など、子どもの学習状況を見取り、いっしょに考えたり、問い直しをしたりする教員の働きかけが大切である。

また、見方、考え方、感じ方の違いや共通点、相互の関連に気付くような学習活動、例えば、

話し合いなどの気付きを交流する場、練りあう場を設定したり、ある児童の知的な気付きを学級全体に広めることで、個人だけではなくそれに刺激された集団を高めるなど、共同的な学びを大切にしたい。

6 実践事例

ア 単元名 第2学年 「もっとしりたいな町のこと -たべものからしらべよう-」

(ア) 単元の目標

- 自分たちが普段食べているものに目を向け、それを生産している人、流通させている人、調理している人などに関心をもち、かかわりをもとうとする。 (関心・意欲・態度)
- 見学したことや聞き取りをしたことをもとに、分かったことを友だちといっしょにまとめ、分かりやすく伝えるようにグループで表現の仕方を工夫することができる。 (思考・表現)
- さまざまな人々のかかわりによって食べ物を口にすることができることを知り、それらの人々に感謝の気持ちをもつことができる。 (気付き)

(イ) 評価規準

評価の観点	評価規準
関心・意欲 態度	<ul style="list-style-type: none"> ・なかまと協力して、調べたことをまとめたり、発表の準備に熱心に取り組んだりしている。 ・自分たちの「食」を支える人たちに積極的にかかわろうとしている。
思考・表現	<ul style="list-style-type: none"> ・「食」に携わる人たちの仕事の内容について予想したり、調べる方法を考えたりしている。 ・分かりやすく伝えるために、発表の仕方を工夫している。
気付き	<ul style="list-style-type: none"> ・自分たちの活動や経験をもとに、「食」に携わる人たちの思いや願い工夫や努力に気付いている。

イ 本実践における工夫・改善の具体

(ア) 「思考」と「表現」の一体化を図る指導の工夫

子どもは楽しそうに活動をしている。しかし、それが体験的な学習であるかと少し首をかしげたくなるような体験も一部に見られる。それは、「体験」から「経験」へと導く指導が十分とは言えないことが原因となっていることが多い。体験は、子ども一人一人の意味世界を広げたり、深めたりする上で、大変重要であり、効果的である。

しかし、それは、あくまで個人の内面にとどまったものであり、体験によって得られた知識や情報は断片的なものであり、多岐にわたるものである。

そこで、「なぜだろう」「どうしてなのかな」と問い直し、思考というフィルターをとおして、意味付けたり、価値付けたり、相互に関連付けたりして、整理したり、練り上げたりすることにより、「体験」から「生きて働く知」へ、「知的な気付き」へと質を高めることができるのである。そこで、その手立ての一つとして例えば、表現活動を効果的に組み入れ、体験を振り返り、そこで感じ、考えたことをみんなで話し合うなど、「体験」を振り返り「経験」へと高める指導が大切である。

本実践では、これまで調べてきたことをグループでまとめ、劇、ペープサート、ポスターなど多様な表現方法を工夫し、まず、学級で発表会を行っている。そして、学級での発表会を振り返

り、それらを生かして、次に地域の人も招待して学年全体でのポスターセッションを行うなど、交流する場、練り合う場等、共同的な学びの場を設定している。体験で得た知識（事実）をもとに自分の思いや考え、友達や地域の人の願いや考えを交流したり、練り合ったりする場を設定することにより、個の気付きから学級全体の気付き、そして、学年全体の気付きへと気付きの質が高められていった。

また、子ども同士の気付きの共有化を図ることによって、「自分のできる役割が増えた。」「自分が友だちや家族の役に立った。」など、自分自身の成長への気付きが深まるとともに、学習意欲を高めることにつながったと言える。

表現を単に絵に表すなど、狭い意味でとらえるのではなく、比べる、特徴付ける、選ぶ、交流する、伝えるなど、「表現しながら考える」あるいは「考えながら、表現する」といった、「言葉」と「体験」をつなぎ、知的な気付きを生み出す活動を工夫するなど、「思考と表現を一体としてとらえた」指導の充実を図ることが大切である。

(イ) 「体験をつなぐ」ことを重視した単元構想

本実践では、1学期に町たんけん公園やお店など、もの・ことに目を向ける体験やトウモロコシの栽培活動をとおして自然の不思議さ、おもしろさを味わわせる体験を設定することで、身近な地域や自然に対する関心や学習意欲を高める工夫がされている。また、1学期の終わりにポップコーンづくり体験を行うことにより2学期の「食」に携わる人たちの仕事に対する気付きを喚起する体験が設定されている。更に、2学期には、調理員・栄養士（調理・食）、農家の人・JAの職員（生産者）、お店の人（販売）という3つの「人との出会いの場」を設定することにより、もの・ことから社会へと子どもの気付きが広がり、深まっていくよう意図的、計画的に体験をつなぐ工夫がされている。

このことは、単元を構造的に捉え、単元のねらいを明確にする中で体験と体験をつなぐ教員の手立てが大切であること具体を示している。つまり、体験がはいまわったり、体験だけに終わってしまわないように価値ある体験に仕立てるためには単元全体を俯瞰し、学習内容を構造的に

7. 学習の様子					
小單元	つきたい力	児童の活動の流れ	評価基準と評価方法	児童の様子	支援・手立て
ポップコーンを作って食べよう	栽培活動への関心 	・1学期に収穫したトウモロコシでポップコーンを作って食べる	・興味をもって調理をしている（活動の様子） ・見つけた変化や思ったことを表現することができ（見つけたよカード）	○ポップコーンがはねる様子を興味深く見て、出来上がりを楽しみにしていた。 △食べる時に友だちと取り合いになる。	・自分たちが育てたトウモロコシで作ったことを確認する。
野さいはどこから来たのかな	興味・関心 興味をもって観察する力	・野菜が自分たちの口に入るまで、どのような道のりをたどっているか、考える	・野菜の流れや、そこに携わる人びとの働きに気づく（発言・つぶやき） ・興味をもって見たり聞いたりしている（発言・つぶやき）	△思いつきで発言するが、友だちの発表や支援者の話をあまり聞かず、鉛筆で遊んでいる。	・普段口にする食べ物などのように流通しているか気づかせる。
野さいを作っている人に会いに行こう	話す人の顔を見て静かに話を聞く力 わからないことを言葉にして質問する力	・農協職員、農家の方から野さいのこと、思いを聞く ・聞いたこと、思ったことをメモする	・見つけた変化や思ったことを表現することができ（色分けした見つけたよカード）	◎最近見た「金時ニンジン」が植えられているのを見て喜び、何度も手を挙げて農協の人に質問をした。	・事前に農協の方と打ち合わせをし、押さえておきたい事柄を伝えておく。
野さいを売っている人に会いに行こう	身の回りの「なぜ」に気づく力	・お店の売り場で働く人の様子を見に行ったり、開店前の作業をビデオで撮ったりする ・聞いたこと、思ったことをメモする	・自分なりに予想したり、追求の方法を考えたりしようとしている（発表メモ） ・わかりやすく伝えるために発表の仕方を工夫しようとしている（発表に使う道具・台本他）	○家族でスーパーへ行き、母親に野菜について教えてもらい、見つけたよカードに書いた。	・児童が家庭からお店に行っていた時の様子を見つけたよカードから見取る。
野さいを調理している人に会いに行こう	見たこと・聞いたことをまとめて、発表しよう	・給食調理員さんの仕事の様子をビデオで撮る ・栄養士さんから話を聞いた質問をしたりして、調理のこと、思いを知る	・グループに分かれて活動する ・聞く人によく伝わる発表の作業を工夫し、協力して作業をする	◎調理の様子を熱心に見ていた。 疑問に思ったことを見つけたよカードに書き、栄養士さんに聞いていた。	・毎日食べている給食を作ったことについている様子や調理員さんの思いを知らせる。
見たこと・聞いたことをまとめて、発表しよう	見たこと・聞いたことを文や絵で表現する力	・聞いたこと、思ったことをメモする ・グループに分かれて活動する	・わりやすく伝えるために発表の仕方を工夫しようとしている（発表に使う道具・台本他） ・協力して活動し、大きな声で発表できたかをふり返っている（ふり返りカード） ・友だちの発表を見ていいところを見つけようとしている（メッセージカード）	△ペアサポートをすることになる。役割分担を決める時、自分のしたい役に合わせ、納得するのに時間がかかる。 ◎欠席が続いた後の発表となったが、台詞をしっかりと覚え、大きな声で発表することができた。 ◎学年発表をした時には、メッセージカードをもらうのを楽しみにし、張りきって活動していた。	・友だちと協力して活動できるように声かけをする。 ・発表練習で頑張っている様子をほめ、他のグループにも紹介する。
お札の手紙を書こう	思ったこと・感じたことを文に表す力	・活動に協力してくださった方に、お札の気持ちを込めて手紙を書く	・気持ちを含めた手紙を書こうとしている（渡す手紙）	○畑見学でお世話になった人に手紙を書いた。	

図1 学習活動の実際

とらえることが重要である。そういう意味からも生活科の特色の一つとも言える「単元の構想図」をていねいにつくる、あるいは、今一度、じっくり見直すことが「学習内容を構造的にとらえる力」を高めることにつながると思う。

7 生活科教育の充実・発展に向けて

平成20年1月に中央教育審議会答申が、また、2月15日には新学習指導要領（案）が示され、生活科は、創設以来十数年を経て、幼児教育との連携を図る等、低学年教育の中核としての役割を担うなど、一層の改善が求められている。

生活科教育がこれまでの実践的研究により積み上げてきた数多くの財産は、新学習指導要領の理念を踏まえた新たな教育の創造の示唆となるものも多い。今後、更に魅力ある生活科を創造し、一層の充実・発展を目指して工夫・改善を図っていかなくてはならない。

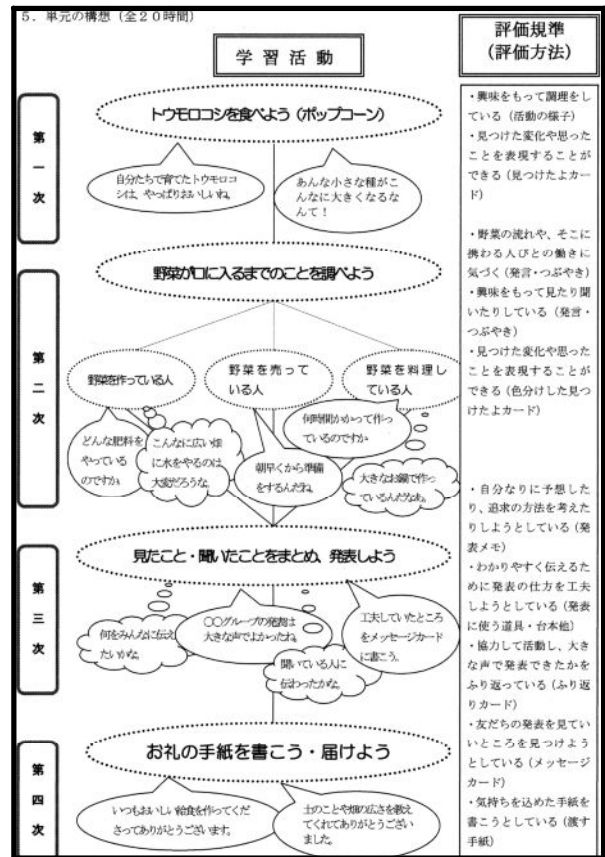


図2 単元構想図

参考・引用文献

- (1) 小学校 生活 指導資料 指導計画の作成と学習指導 文部省 平2
- (2) 小学校 生活 指導資料 新しい学力観に立つ生活科の学習指導の創造 文部省 平5
- (3) 小学校 生活 指導資料 新しい学力観に立つ生活科の授業の工夫 文部省 平7
- (4) 初等教育資料 平成15年2月号（No. 765）指導法研究講座11 [生活] 実りある学習指導の実現をめざして —評価規準の設定と活用—
- (5) 初等教育資料 平成15年10月号（No. 773）指導法研究講座19 [生活] 生活科における資質や能力を確かなものにする授業の工夫改善
- (6) 初等教育資料 平成16年6月号（No. 782）特集I「確かな学力」を育てる学習指導の工夫改善 —論説— 生活科における「確かな学力」を育てる学習指導
- (7) 初等教育資料 平成16年11月号（No. 787）指導法研究講座32 [生活] 生活科学習指導のセンスと技術
- (8) 初等教育資料 平成17年7月号（No. 798）特集II 子どもたちのよさを生かす学習指導の創造的展開 [生活] 子どもたちのよさを生かす生活科学習指導の創造的展開
- (9) 初等教育資料 平成18年10月号（No. 813）特集I 学ぶ意欲を高める学習指導の改善 —論説— 学ぶ意欲を高める生活科学習指導の改善
- (10) 第10回近畿地区小学校生活科教育研究協議会 京都大会紀要 第3分科会提案I 体験活動を生かした学習活動 提案者 奈良県王寺町立王寺小学校 教諭 竹谷あづさ